

## 台湾史研究からの考察 Points of Views from Taiwan Studies

清水 美里

SHIMIZU MISATO

日本学術振興会特別研究員 PD

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

### キーワード

台湾語 植民地支配 公共性 神社参拝 記憶

### Keywords

Taiwanese; Colonial Rule; Publicness; Shinto shrine worship; memory

*Quadrante*, No.19, (2017), pp.83-88.

### 目次

1. 教会白話字への着目
2. 本書の構成に埋め込まれたリレー
3. 裏切られ裏切させられる経験
4. 植民地下の公共財の二重基準
5. 均質化への挑戦

### 1. 教会白話字への着目

人之初 性本善 性相近 習相遠

jîn chi choh • sèng pún siān sèng siōng kīn  
sīp siōng oán (78 頁)

人の初め 性本善 性相近し 習い相遠し

Man at their birth are naturally good. Their  
natures are much the same; their habits became  
widely different.

(Herbert A. Giles "Elementary Chinese 三字經  
second edition" 1910)

上記は「三字經」の冒頭部分を漢文<sup>1</sup>すなわち中

<sup>1</sup> 日本植民地期の台湾は正則漢文の他に、クレオール現象が見られる漢文のバリエーションが存在した。陳培豊『日本統治と植民地漢文—台湾における漢文の境界と想像』三

国語・閩南系台湾語教会白話字・日本語・英語の四種で表記したものである。この四種が、本書が扱う資料の言語であり帝国のはざまに置かれた台南長老教中学校を分析するために必要だった言語である。

本書の内容への言及に入る前に、上記の複数の言語に向き合う意味について述べておきたい。中国語、日本語、英語は近代において国民国家の言語としての地位を獲得した。一方で「閩南系台湾語」は虐げられてきた言語であった。

「閩南系台湾語」(77 頁)とは本書での呼び方である。台湾の街中では台湾話、あるいは台語と呼ばれるものであり、1994 年から段階的に導入された小学校での郷土言語教育の中では閩南語とされ(山崎直也「台湾における教育の「本土化」と中国」『海外事情』50 卷 9 号、2002 年)、日本の言語教育では「台湾語」とする教科書や辞書が流通している<sup>2</sup>。閩南とは台湾を含む福建省南部の地域を指す。よって、「閩南系台湾語」は台湾だけで話されるものではなく厦門など福建の閩南語圏でも通じ合うものである。かつ、台湾には「客家の言葉や先住少数民族の言葉もあったので」すべての台湾人の母語でもなかった。ただし、本書の定点

元社、2012 年。

<sup>2</sup> 本稿の台湾語に関する記述は、樋口靖『台湾語会話 第二版』東方出版(2004 年)および、村上嘉英編著『東方台湾語辞典』東方出版(2007 年)に依拠するところが大きい。また、筆者は樋口靖氏の講座を受講していたことがあり、その内容に依拠した記述でもある。



観測の場である長老教中学校が所在する台南地域は、客家が少なく、キリスト教に改宗した平埔族（シラヤ族ほか）も漢化が進んでいたため、「閩南系台湾語」によるアイデンティティ形成が可能な下地があった。

これを宣教師が自身の学習と聖書の翻訳、伝道のためにローマ字で表記したものが「教会白話字」である。これはまた教会ローマ字とも呼ばれる。漢字の読み書きには年月を要する。文字はこれを使えないものにとっては魔術と同じである。書かれたものは第三者の記憶を介さず時空を超えることができる。そして、漢字は長らく「ただひとつの特権的な表象システム」（アンダーソン）という地位を科挙制度によって約束されていた（81頁）。一方で、ネイティブスピーカーにとって教会白話字は数ヶ月で習得が可能な文字体系である（77頁）。

冒頭に引用した『三字経』を「閩南系台湾語教会白話字」で表現する際、本書の挿絵に使われたイード編『三字経新撰白話字註解』（1896年）では、左列に漢文、中央と右列に教会白話字が書かれている。一文字目を例に挙げると「人 | jîn | lāng」となる。jîn と lāng の違いは文言音と白話音、すなわち文語と口語の違いである<sup>3</sup>。人という字は、単独では lāng と読むが、例えば人命という熟語では jîn bēng と読む。現代中国語の古典的表現と話し言葉の差と同レベルのものではあるが、左列と中央、中央と右列を隔てる線は読書人と老百姓を隔てる階層を可視化するものとみなすこともできる。

反対に、文言一致体は主体的な言語表現の民主化と言えなくもない。表音文字である教会白話字は文言一致を可能にする。これは教会を通じて広められ、教会組織のなかの現地リーダー養成に活用された。このようにキリスト教と教会白話字を通じた新たな社会的上昇移動の経路が生まれたのであった。長老教中学校はその経路の形の一つであった。

しかし、教会白話字の普及率は低い。かつて筆者は嘉南農田水利会の調査で職員 OB の徐氏に案内を受けたことがある。夫妻ともに第二言語とし

て上品な日本語を話され、氏は筆者には日本語で説明した後、その場にいた職員の方々におそらく同じ内容を台湾語で話されていた。現役の職員の方々が傾聴していたことがとても印象的だった。さらに氏は、自身の回想録を日本語で書いたが中国語では書けない、だから今の若い職員は誰も読むことはできないのだと述べられた。これは、十代まで日本語で教育を受けた徐氏が中文で文章を書くには困難が生じることを指している。植民地支配の共通項として、第一言語では文字を書くことができず、文章を残すには第二言語となった支配者の言葉が必要となるが、それは第一言語のみで生活している人びととの断絶を生むのである。教会白話字も普及率が低いままではその断絶を埋めることはできない。

イード編『三字経新撰白話字註解』が台湾割譲時の当地の言語状況を示したものだとするれば、林茂生が連載した「新台湾話陳列館」は台湾語を世界と繋げる試みであった。それは、長老教中学校を去らねばならなくなった林茂生が、「新しい文明があれば新しい生活があり、新しい生活があれば新しい思想があり、新しい思想があれば新しい言葉が用いられる」として作成し、教会白話字と漢字で台湾語を綴り、日本語、英語の意味と中華民国における中文の表現を記し（527頁）、本書は特記していないが、これに古典の引用を添えた字典であった。古典に親しみ適切に引用する能力は、漢字文化圏の社会的地位上昇に必要とされた。林茂生は教会白話字の需用を高めるために何が必要か、正確に見定めていた。

現代では Wikipedia の台湾語版に教会白話字 (Bân-lâm-gú) が用いられている。加えて、漢字と教会白話字を組み合わせた「漢羅」と呼ばれる文体があり、エッセイなどの文学作品を生み、一部で台湾語の有望な書記システムとして使われている。

「閩南系台湾語教会白話字」による歴史資料は相対的に多くは残されていないが、台湾人の母語による主体的な言語表現として貴重なものである。歴史研究にこの「閩南系台湾語教会白話字」で書かれた資料を取り入れた研究はまだ多くない。そういった意味で先駆的であると同時に、「新台湾話陳列館」の多言語性（マルチリンガル）は、帝国のはざまに立つ長老教中学校、そして林茂生の可

<sup>3</sup> 本書では中央を官話、右列を閩南語白話字としているが、どちらも閩南語でその中の文言音と白話語の違いであるため、誤解を招く言い回しである。

能性の痕跡であり、それが痕跡となってしまった不可能性への思考を助けるものである。資料言語として複数の言語をただ扱ったというだけではなく、それぞれの権力関係を資料言語から浮かび上がらせる試みを、まずは本書の意義の重要な一点として明記する。

## 2. 本書の構成に埋め込まれたリレー

次に筆者なりに簡単に本書の構成について述べる。より詳細な内容の把握は、本書の巻末に順を追った各章の要旨、日・中・英文のものがあり、また、高井ヘラー由紀氏が台湾キリスト教史の立場からの書評を執筆されている(『キリスト教史学』70集、2016年)ので、これらを参照していただきたい。

本書は3部からなり時系列に並べられている。また第1部にある第1章から第3章までもほぼ時系列になっているがそれだけではなく、ヒュー・マカイ・マセソン(第1章)、伊藤博文(第2章)、李春生(第3章)という人物を取り上げながら、マセソンと伊藤、伊藤と李の接点をエピソードとして織り込んでいる。さながらイギリス、日本、台湾で成り上がった三者のリレーのようである。しかし本書は一方で、伊藤と李の面会においては潜在的な緊張について言及している。それはこの「文明」・「近代」のリレーが帝国主義的であったからだといえる。

そして第3章の後半では別のリレーの始まりが挿し込まれる。林学恭・黄能傑のキリスト教改宗を起点にし、彼らの息子・孫へとつながるリレーである。二人の息子、林茂生と黄侯命は第2部、第3部のキーパーソンである。彼らは父と同じく台南の長老教会に教職および神職につき、そして追放された。さらに孫の林宗義と黄彰輝については終章で取り上げられている。林・黄三世代のリレーは「われわれ」の空間を求めるものであった。

第2部の第4章と第5章、第3部第7章と第8章は、大陸中国や日本内地の状況に目配りしつつ長老教中学校を定点観測したものである。第7章の表題は日本内地を中心に論じたもののようにみえるが、これは第8章の台南長老教中学校排撃運動の伏線であるとともに、長老教中学校の関係者がそれぞれ神社参拝をどうとらえたかについて論

じた章である。第3部の第9章と第10章は第8章の台南長老教中学校に向けられたミッションスクール排撃のファッションの台湾内外への波及を論じたものである。一方で、第2部の第4章補論と第6章は長老教中学校に去来するできごとを分析するために必要とされる議論群である。

以下、第4章補論と第6章にあげられている論点を、他の章で取り上げられた事例につなげながら見ていく。

## 3. 裏切られ裏切させられる経験

まず、第4章補論は「補」ではあるが、「重要度が低いわけではない」(239頁)という。筆者もこの点、同意する。さらに言えば、ここで展開される論点は汎用性が高いと考える。ここでは、1920年代当時の台湾の私立学校を俯瞰する内容であるが、これは台湾人の「裏切り」の経験であり、また「なぜ自分は」という懊悩から、「なぜ自分たちは」という苦難への悲しい階段であった。裏切りとは、ひとつは総督府によって、「上昇移動への期待が裏切られる」(238頁)というもの、そしてもうひとつは共同体への裏切りを強いられるということである。前者の裏切られる経験は、具体的には第一次台湾教育令によって課せられた制限と台湾人の寄附金によって設立された公立台中中学校が日本内地より水準が低いものであったことを指す。だが、これは共通の記憶としてナショナリズムの形成につながる可能性がある。一方で、後者の仲間を裏切るという体験は、孤立、分裂を生む。大多数が社会的上昇移動を助けるはずの教育の機会を摘み取られるなか、例外的に総督府によって高等教育の機会を与えられたものは、その例外性を強調されることにより「孤立化した状態のなかで自らの台湾人性を否定することを迫られていた」(333頁)のである。

第3部のファシズムの中になると、大多数の仲間が裏切られるという経験が加わる。第8章で黄侯命は東門教会の牧師の地位を追われる。それはイギリス人のバンド校長から長老教中学校の辞職を迫られるよりも辛く、親族との死別に値するほど苦しい経験であったという(524頁)。第10章には、朝鮮の三千浦教会・草梁教会の信徒だった趙寿玉の「警察からの迫害は恐ろしいには恐ろし

いけれど、精神的にシッカリしておれば、耐えるのはまだ容易なのです。しかし、教会の中で感じる圧迫は、それはつらかったですよ」という語りがある（606頁）。

本書は「慇懃な人種主義」が、被支配者の「主体的」かつ「能動的」な「自己決定」を調達していくことになる」と述べ、これをテロルの「効果」とみなすべきだと主張する（651頁）。その「自己決定」のなかには、仲間を裏切る・拒絶するという行為が含まれる。さらに、これらの「裏切り」による分裂は、共同体の分裂・亀裂のみならず、個人の精神分裂を引き起こした可能性に言及している。この、裏切るだけでなく裏切らせる暴力の究明は本書の功績のひとつである。

神社参拝はその「自己決定」を演出する舞台装置の一つとして組み込まれていたという。本書で度々言及されているように、台湾での神社参拝は台湾統治の正統性に直結する問題であった。なぜなら台湾での神社参拝は具体的な征服者に対し頭を下げることであったからである。台湾に建てられた68の神社のうち60社は北白川宮能久親王を祭神に祀っていた（297頁）。

北白川宮は台湾で戦病死した人物である。総督府は北白川宮を「天皇に刃向かう「悪者ども」を鎮めた「神」として台湾各地の神社に祀ったわけであるが、この「悪者ども」とは日清戦争で日本に割譲されたことに怒りを覚え、武器を持って立ち上がった台湾人である。北白川宮は病死ではなく台湾人の手によって暗殺されたのだという噂は、ある種の民間信仰のように根付いていた（矢野一也『台北車站』新評論、1986年）。1922年には故北白川宮能久親王御遺跡の碑文中、「王」の字が削られ土に埋められるという事件が起き、検挙者8名は1895年以後の蜂起で戦死した人物の家族とされている（台湾総督府警務局編『復刻版 台湾総督府警察沿革誌』緑陰書房、1986年）。

この視点は欧米宣教師たちには欠落していた。宣教師たちは神社参拝に対し、「純粹」に信仰の問題としてこれを捉え、宗教の自由を盾に拒否するか、あるいは朝鮮にいたH.H.アンダーウッドの「丁寧に頭を下げることはキリスト教徒としての良心に反することなく可能である」というような考えとの間で揺れていた（603頁）。他方の台湾人にとっては、宗教の問題のみならず民族の問題（あ

るいは親兄弟の仇）という二重性を孕んでいた。

ただし、この段階での民族主義は今日的な台湾サイズの民族意識ではなく、漢族として日本の圧制に苦しむ共同体としての意識、「チャンコロ」と罵倒される経験から形成されたものである。他方の台湾の先住民族に用意された蔑称は「バンジン」である。この両者は当時「われわれ」意識を共有することはほぼなかった。本書は林茂生とツオウ族の矢多一生（Uyongu Yatauyungana、高一生）が、学年こそ違え同じ台南師範学校出身でありながら連帯がない点にふれている（364頁）。この目配りは、歴史家として時代性を描く力として優れていると感じる。

本書では神社参拝を宣教師と台湾人との間に打たれたくさびとして有効に論じ、また漢族と台湾先住民族との距離（福佬と客家にもあることを想像させる距離）に言及している。また、「われわれ」意識を共有していたはずの台湾人社会内部にまで亀裂が入る経過を論じていった。だが、若干の物足りなさを覚えなくもない。神社参拝はそれだけではなく、かつての敵を忘却させるための装置、仲間を裏切らせるための装置として作用したのではないだろうか。

つまり、この神社という装置は民族主義の発露を宗教性で消す「効果」も備えていたのではないかと考えている。長老教中学校排撃運動は民族主義的な側面をもつ事象を、宗教的なものを全面的に出し、反逆者に「邪教」のイメージをかぶせ問題を特殊化し、植民地支配に反抗的な民族主義の拡散を防いだのではないだろうか。さらに当事者（林茂生）にとって神社参拝を拒絶する民族性とキリスト者としての宗教性に起因する心情が完全に分けられないものであるだけに、その作用の有効性があったと筆者は考える。この点、実証は難しく、ないものねだりであるかもしれないが、本書は他に大胆ないくつかの指摘をしているだけに、裏切らせる暴力装置の解明とその非人道性についてより踏み込んだ分析があっても良かったのではないかと感じる。

とはいえ、二重性をもつ「裏切り」の経験への着目は植民地支配の傷の深さを考えていくために非常に大切な作業である。現在も歴史記憶による

内部分裂<sup>4</sup>が生じているなか、未来においてこれを再生産させる力を封じるものになるはずである。

#### 4. 植民地下の公共財の二重基準

第6章では、林茂生の英文の博士論文を用い、公共性の重層性を論じている(369-371頁)。本書は教育史に位置する研究であるが、ここでの学校の「公共」性に則した議論は、他の社会資本(道路・港湾・鉄道・電信・水利・水道・公園・病院など)に転換可能な普遍性を備えている。それは、公共性には(台湾人が)相互に協同しながら自らのイニシアティブで創設したという次元のものと、「公」の管理に属するという次元のものが、植民地支配によってズレが生じるという指摘である。

植民地台湾では、律令の中に「公共」という語彙が存在する。本書でも度々登場する府令第86号では「公共ノ利益」を目的として寄附金を募集する場合には総督府の認可を受けよと定めた。「公共ノ利益」という言葉は多分に public なものを想像させる。しかし、この律令は「公共ノ利益」の公共性 publicness を骨抜きするものであることが、本書によって明らかにされたのである。

筆者の専門である水利史の領域では、1901年に「公共埤圳規則」という律令が布かれた。これは「公共」という翻訳語と「埤圳」という溜め池と水路を意味する現地の語彙を含む。この律令により、それまでは「民」で運営されていた用水設備が行政官庁の管理の下に置かれるようになった。並行して、用水設備の運用で収入を得ていた人びとから、その権利の買い上げがなされている。このように個々の用水設備の権利者を消滅させ private なものを「公」のものに転換させていった(清水美里『帝国日本の「開発」と植民地台湾—台湾の嘉南大圳と日月潭発電所』有志舎、2015年)。

台湾人にとって「公」=official なものは official language である日本語がそうであるように、自分たちの物ではない。official なものを使えないわけではないが、それを活用するためにはいくつかの障壁と困難が伴うのである。よって、対立的な概

念ではないはずの official と public が植民地的状況下では二項対立として浮かび上がる。

本書を通じて論じられているのは、その「公共財」である学校の official 化をはかろうとする総督府・軍部と、それに抵抗し public な空間を堅持、拡散し活性化させようとする台湾人の攻防である。ただし、総督府の「official 化」はある段階では台中中学校の例のように台湾人に金銭の提供のみ参与させ、管理運営からは排除するという二重基準によって行われた。全体主義の支配になると、public な空間が段階的に狭められ、「自主的」かつ「能動的」にその空間を差し出す演出がなされながら篡奪された。さらに言えば、ミッションスクールにおいてはその演出の舞台にすでに台湾人はおらず、禅譲は宣教師が担った(584-585頁)。

帝国日本が植民地の社会資本の整備に果たした役割について、過去の先行研究では大きく二つの見解に分かれていた。一つは帝国主義の収奪だとするもの、もう一つは近代化だとみなすものである。1990年代に、「植民地(的)近代(性)」Colonial Modernity という新しい議論が提示された。それは植民地主義も近代の一側面とみなし、この両者は共犯関係にあるとするものである。しかし、現状の東アジア研究ではこの問題はいまだ解決されず、むしろより複雑化している。

その理由の一つは「公共性」のとらえ方にある。序章で整理されているように、朝鮮史研究では並木真人が植民地朝鮮の人々が無力で無能な犠牲者であったというイメージを打破するために、植民地下の朝鮮人の主体性や自発性を描く試みとして「植民地公共性」を論じた。並木はこの提言によって植民地の中に政治を見出すことができると考えた。これに対し、趙景達は植民地支配の本質とは収奪・差別・抑圧とそれを担保する暴力の体系性であり、並木のいう植民地公共性は総督府と都市・知識人のための空間であって、ほかの朝鮮の一般民衆のためのものではない、政治文化は一般的には支配者と被支配者のあいだで共有されるが、植民地社会では共有されないのだと、植民地公共性を否定した。これらの議論の中で尹海東のように public と official の区別に着目しつつ議論を展開するものもあったが、本書は並木を public と official の「両者の性格の違いを十分に検討するこ

<sup>4</sup> 台湾では対日協力批判がないように思われがちであるが、霧社事件における味方蕃、「御用紳士」と呼ばれた政商に対する評価、知識人研究の偏在などにある種のタブーが存在する。

となく、不用意に議論を横滑りさせている感が否めない」（16 頁）と批判している。補足すると、松本武祝は植民地にも公共財の管理をめぐる「公共空間」があり、それは植民地的特質をもったと主張している。たとえば、朝鮮人の交渉方法が植民地当局の指定したものへ転換していくという点がある（松本武祝「植民地朝鮮における河川改修事業をめぐる「公共性」—全羅北道・万頃江を事例として」『日本植民地研究』27号、2015年）。

このように植民地に「公共」空間はあるのかという問いは、度々論争化してきた。だが、本書の分析手法を応用し、社会資本の整備・運用における摩擦の事例を public と official のせめぎ合いとして整理することで、その植民地性を抽出することを可能にし、植民地の「公共」空間をめぐる議論を精緻させることができると考える。その中には、自治的な空間の中で「自発的」かつ「能動的」な「自己決定」によって支配に従属していくものもあれば、支配者側の機能不全やシステム障害などのすきを突き、支配を出し抜く可能性もあったであろう。その際、林茂生のアメリカ留学のように、第三の地における体験がその後の台湾人の運動にどのように影響したのかという点は非常に興味深いものがある。これらの議論は筆者のような他分野の研究者にとっても大いなる示唆を与えるものである。

## 5. 均質化への挑戦

最後に、本書の台湾史研究における貢献として、林茂生の単一的に流されがちな「被害者イメージ」の克服ということがあげられる。これは、神社参拝拒否への苛烈な報復措置の被害者ではなく、戦後の2・28事件で命を奪われた被害者というものである。林茂生は、おそらくは意図せざる結果として、2・28事件被害者のシンボルとなった。

あとがきにおいて、終章から本書を読む提案がなされているのは、これが2・28事件の記憶の均質化の罨への挑戦ともなっているからであろう。林茂生のほか、表紙の油絵の作者である陳澄波、ツオウ族の教育者・矢多一生（高一生）を含め、2・28事件・白色テロのむごさを物語るために、彼らの優れた才能が語られてきた（注終章122頁）。2・28事件の究明は重要な仕事であり、かつ台湾における台湾史研究の起点ともいえる作業である。

一方で「被害者」という言葉には無垢・無力といった「無」の形容詞が付きまといがちである。序章にある松田素二が指摘する均質化と異質化の罨に陥っていなかったとは言えない。2008年日本台湾学会設立10周年記念シンポジウム「台湾研究この10年、これからの10年」において、著者はパネルディスカッションの中で「ほかのパネラーの研究への問題提起」を行い、質疑応答のなかで複数の反批判を受けた。その中で三尾裕子氏より、駒込氏の歴史学は悲劇的なヒーローを求める歴史学ではないかという反批判があり、これに対し「たしかにいわれてみれば、悲劇のヒーローを求めたがるところもあるかもしれないと思います。」と発言した。続けて、本書の元になった研究に言及し交渉のテーブルがどんどんせばまっていく歴史的状況があるのだと主張したとはいえ、まずは批判を一端受けとめた（『日本台湾学会報』11号、2009年）。

こういった自身への批判の一つひとつ真摯に向き合ってきた結果が、一つひとつは微細であるが、重ねていくと威力となる「新台湾語陳列館」のような取り組みを浮き上がらせ、台湾人の「夢」として長老教中学校を論ずる、この力作となったのであろう。